小学生が応急手当てを 学んでいます

いざというときのため小さいころから 繰り返すことが大切

夏真っ盛りです。楽しいはずの海やプールで悲しい事故が起こり、報道される日も少なくありません。こうしたことにならぬよう「子どもに命の大切さを教えたい」と思っても、どうしたらよいのか分からないという人が多いのではないでしょうか。平成十年から「学校と消防職員の自主研究グループが連携して授業に応急手当ての学習を取り入れる」という試みが本市で進められ、その論文発表が全国で最優秀賞に輝きました。小学生たちがどう学び、感じているのか。この活動に携わる消防職員の皆さんに話を聞きしました（担当は市民編集員・大沢、諸岡）。

問い合わせは消防本部警防課☎220―4513へ。

全国消防長会総会で表彰
研究論文が最優秀賞に

平成十七年度「消防機器の改良・開発及び消防に関する論文」で、本市の消防職員五人の研究が全国で最優秀賞に選ばれました。

論文のテーマは「小学校教諭が中心となって行う応急手当学習」。この研究は救急救命士からなる自主研究グループによって、勤務時間外に行われたそうです。市内の小学校に協力を依頼して、三年生から六年生までを対象に応急手当てを授業に取り入れました。継続して指導を行うとともに、命の大切さを伝える活動の成果が発表の内容です。

六月七日に横浜市で開催された全国消防長会総会で、代表者が論文発表し、全国消防協会会長から表彰を受けました。

先生が授業の一環で指導
平成10年から小学生へ

平成七年から始まった、一般の人を対象にした救命講習会には、これまで延べ五万人以上が受講。年々、参加者が増える傾向にあります。

しかし、「講習を受けたことはあるが、内容を忘れてしまい、実際に心肺そ生法などの応急手当てを行う自信がない」という人が多く、せっかくの経験が生かされていないのが実情です。

これは、定期的に継続して受講する人が少ないことが一因。繰り返して何度も体験してもらうことが、応急手当て講習の大きな課題となっていました。この課題を解決するために、救命救急について啓発する取り組みは、「講習会を開くので消防署へ来てください」という受け身の形から、「要望があれば指導に行きます」という積極的な方法に変わりつつあるそうです。

そうした中で、全国的にも例のない小学生の応急手当て講習の調査・研究を開始しました。「感受性豊かな小学生に応急手当てを教え、大人に成長したときには、緊急の場面ですぐに実行できるように」と、平成十年から実施。東小や元総社小などで三年生以上を対象にして、教諭の協力の下に心肺そ生法などの応急手当てを授業の一環に取り入れる試みが実現しました。

楽しい水遊びも安全に気を付けて（市民プールで）

学校・家庭共に必要性感じ
学年別で段階的に学習

講習内容は保護者の意見を聴いて、学年別、段階的に学ぶことにしたそうです。しかし、二十四時間交代制で働く消防職員が多くの児童を指導することはとても困難。そこで「小学校教諭が中心となって行う応急手当学習」という、新しい指導法を試みました。消防職員は補助者として参加する方法です。

心肺そ生法を学校で習っている東小の児童たち

三年生に「119番通報の仕方と止血法」、四年生に「骨折の固定法と異物除去法」、五・六年生に「心肺そ生法」をそれぞれ学ばせます。四年間続けて学ぶことによって、ほとんどの子どもたちが大人顔負けの実技ができるようになったそうです。

また、学校と家庭にアンケートを実施。「授業に応急手当てを取り入れること」には先生から百%、保護者から九八%の賛成意見が得られました。また、心肺そ生法を学習した五・六年生の九八%が「応急手当ての必要性と命の大切さが分かった」と回答しているそうです。

「大切な家族や友人がそばで突然倒れたらどうしたらよいのか」。心肺停止後、三分間で五〇%の確率で死亡してしまいますが、市内で救急車が到着するまでに平均五～六分かかります。

119番通報後、救急車をただ待つだけでは、助かる命も失われてしまうのです。一人でも多くの命を救うことができるように、子どものころから応急手当てを学ぶことの大切さを広めようと、消防職員の取り組みが続けられています。

命の大切さを伝えながら
先生も専門的に学んで

子どもたちの指導に当たった先生から、自分自身にも大きな成果があったという声が多く寄せられているそうです。指導するには、正確で豊富な知識や技術が欠かせません。まして、命にかかわる救命講習であれば、なおさらのこと。これに携わる先生たちが事前に消防職員から専門的に学ぶことによって、学校内の救命救急に対する危機管理能力のさらなるアップにもつながるでしょう。

近年、ますます核家族化が進む中で、子どもたちが身近な人の死に接する機会が少なくなりました。こうした体験のないまま成長し、命の大切さがおろそかになっていないか心配です。これからは、すべての学校で「子どもへの応急手当学習」が授業に取り入れられ、合わせて命を守る大切さを学ばせることが必要ではないでしょうか。